

第1セッション：質 疑（抄録）

林 和生（司会）：最初に、一番目に報告いただきました楊先生に対して、中部大学の澁谷先生にコメントと質問をお願いいたします。

澁谷鎮明：中部大学の澁谷でございます。楊先生の発表について簡単にコメントさせていただきます。今回、世界遺産に指定された水原という町について、ご専門分野である古地図や歴史史料、写真などから非常に良く理解することができたと思います。その中でいくつか興味深いところについてお話をしたいと思います。

一つ目は、水原の華城という城郭について、18世紀に正祖という個性的な王様が造った特殊な都市という印象を持ちました。その特殊な点というのは、きわめて伝統的な考え方と当時の先進的な考え方が両方とも盛り込まれていることだと思います。前者は、特に伝統的な儒教の考え方にもとづいて王の父の墓を移転したことを契機に新都市建設が始まったということと、それ以外にも非常に伝統的な考え方をもとにして都市の構成ができあがっているということです。後者は、伝統的な考え方的一方で、実学という当時流行した先進的で実用的な技術を使おう、そう考えた人々を起用して当時の先進技術を使って水原という都市を建設した点です。そういう意味では、水原の華城という城郭は、非常に特殊な都市なのではという印象を持ちました。それからやや余計な話ではありますが、例えばイギリスなどのニュータウンというような考え方がもしなかったとしたら、東アジアで新たにゼロから都市を造ろうする場合には、このような姿になっていくのかなと考えました。

二つ目は楊先生の発表の中にもありましたが、水原が世界遺産に登録された時に、軍事建築物としての城郭が高く評価されたという

ことです。しかし、先生のお話を聞く限りでは、恐らく重要なのはそれだけではないだろうと思います。例えば、地域計画に近いような造り方で都市を建設しているというように、都市造りの理念なども重要な要素として考えて良いのではないかと思います。他にも発言したいことがあります、時間がありませんので以上で終わります。

林 和生：ありがとうございました。澁谷先生のコメントに対して、楊先生の方からご発言をお願いいたします。

楊：澁谷先生、コメントをいただきありがとうございます。私たちは都市のスキームを考えると、また地理学者として都市や地方を考える場合には、常に文化的側面や歴史的側面というものを大事に考えております。そういう面から先生から貴重なコメントをいただき感謝いたします。

林 和生：続きまして李先生のご報告に対して、東京学芸大学の古田先生にコメントと質問をお願いいたします。

古田悦造：東京学芸大学の古田です。まず、多くの興味ある写真やスライドを用いて、私たち日本人にも容易に理解できるように配慮されたご発表に対して深く感謝いたします。では、コメントを2点、質問を1点申し上げたいと思います。

一つ目のコメントでは、ソウルの都市景観の変遷を水平的側面、そして垂直的側面という2つの視点から簡潔にまとめられた点を評価したいと思います。二つ目では、ソウルの都市景観における歴史的、そして文化的要素の保全を環境問題との関係で論じられた点を評価したいと思います。次に質問ですが、ソウルの中心部にインサドン（仁寺洞）という小さな通りがあります。そこには多くの外国人観光客が訪れています。インサドン

はかつては汚い感じがしたのですが、近年は再開発されてかなり綺麗になっているかと思えます。インサドンの再開発も、コメントの二つ目の問題、すなわち文化的、歴史的要素の保全と環境問題との関連から、小規模ですが関連しているのではないかと思いますがいかがでしょうか。そして、歩行者のみのグリーン・ベルトというようなものに将来なる可能性はないのでしょうかと。

林 和生：ありがとうございます。では李先生、ただ今の古田先生のコメントと質問に対するお答えをお願いいたします。

李：私の個人的な意見を申しますと、インサドン通りはもともと李朝時代に中人が住む伝統的な住宅街で、美術活動の中心地として栄えてきました。20世紀に入って、日本人が古美術品店を開いてから、書籍、古美術に関連した商店街が建ち並びはじめました。1980年代以降、骨董品、古美術、画廊、古家具店、民俗工芸品店などが続々とできて、街の雰囲気が大きく変わりました。

これが再開発をされたのが大体5・6年前なんです、ソウル市政府の方から開発プランが提示されて今のようなモダンな街並みに変わって参りました。ただ、私自身はこの変化は好きなわけではありません。なぜなら、伝統的な韓国の家々が通りから全く無くなってしまい、また古美術品や骨董品などを扱う伝統的なお店も他の場所に移ってしまったからです。確かに通りは綺麗で、お店がいっぱい立ち並んでいて、土日は車の通行が制限されて歩行者通りになっていますが、そこには韓国人よりも外国人観光客でにぎわっています。またインド人やパキスタン人など外国人が経営する店がいっぱい出ていて、世界中から人が集まっています。ただインサドン通りからひとつ奥まった路地に入ると、まだ伝統的な飲食店や商店がたくさん残っています。土日には歩行者通りになっています。

林 和生：ありがとうございました。続いて3番目の鍾先生のご報告に対して神戸市外国語大学の小島先生からコメントと質問をお願いいたします。

小島泰雄：神戸市外国語大学の小島です。鍾先生は、都市形態の歴史地理学について報告されましたが、都市形態の歴史地理学研究は矢守一彦先生が4つの要素に分けて研究を進められてきました。すなわち都市核、広場、街路そして囲郭（citywall）の4つについて都市形態の歴史地理学研究が進められてきたと考えられます。鍾先生はこのうちの囲郭について報告されましたが、これは都市形態の歴史地理、特に東アジアの都市形態の歴史地理の中でも最も注目を集めてきた領域です。そしてこの第1セッションは東アジアの都市景観を扱いますが、そこで中国の占める位置が大きいことは恐らく皆さん共通して認識していることと思います。その中国の囲郭を対象とした鍾先生の報告は、このセッションにおいてだけでなく、東アジアの比較都市研究という観点からも2つの大きな貢献をなしたというふうに私は考えています。

1つは中国の囲郭というものが単一のモデルで語り尽くせるものではないことを確認させていただけたことです。従来中国の歴史都市研究、特に囲郭を中心とした歴史都市研究が中国の乾燥地域における都市囲郭を中心に研究が進められてきたのに対して、鍾先生の報告は湿潤地域の都市囲郭を取り上げられたことで、中国の中における多様性というものをお私たちに気付かせてくれたと考えています。もう1つは、日本語で言うと「お堀」ですが、今日の話だとmoatでしょうか、この「お堀」が2つの意味を持つことを私たちに気付かせてくれたことです。それは囲郭つまりcitywallと同じ「区切る」という役割をこの「お堀」が持っていることと、また水路として「繋ぐ」という役割を持っていることを指摘されたことです。

そこで是非この機会に鍾先生にお聞きしたい質問が1つあります。今日お話しになったのは江南、鍾先生の概念では「呉越地域」ですが、この江南の蘇州や紹興などを事例にモデルを紹介頂いたのですが、中国では例えば長江中流域や華南の広東デルタ辺りにも湿潤な地域が広がっていますが、そうしたところでも、江南で確認されたような「夾城作河」モデルというのは見られるのだろうかというのが私の質問です。

鍾：私が調査した限り、江南地域以外の中国を大きく北と南に区分した場合、北方地域には「夾城作河」構造をもつ事例はみられません。例えば天津、また江蘇省北部の城郭都市である淮陰、そこには城郭の内側には溜池、これは城壁を造るために掘った跡と考えられるんですが、完全な「夾城作河」構造とは認められません。長江中流域、あるいは南方地域で私が調べたところでは、江西省の南昌でしか確認できません。南昌は呉越地域には属しませんが、南方の湿潤地域に位置しています。江下流のデルタに立地し、豊かな水環境に恵まれています。この事例で考えるとやはり「夾城作河」構造は地理環境と緊密に関わっているのではないかと思います。以上です。

林 和生：どうもありがとうございました。ただいま3人の先生方からコメントと質問をいただき、報告して頂いた3人の先生にそれぞれお答えして頂きました。今日の3人の先生方のご講演はいずれも非常に興味のある内容でした。時間はあまりありませんが、フロアの先生方からも是非ご質問をして下さいますようお願いいたします。

石原 潤：奈良大学の石原です。鍾先生に質問したいのですが、「夾城作河」構造というのは非常に興味深い新しいアイデアで、それを見つけ出されたことに敬意を表したいと思います。それと関連して私が興味を持つのは、そうした囲郭の形が丸いか四角いかとい

う問題ですが、Fig 2で「夾城作河」構造のモデルが示されています。これは鍾先生のオリジナルなモデルだと思うのですが、これは丸い円形で書いていらっしゃるんですね。それからFig13の嘉定市は非常に有名なやはり円形の囲郭を持つ都市ですね。また蘇州の場合は四角い構造なんですけど、恐らく蘇州は非常に重要な都市ですので、北方的なその都市は方形であるべきだというアイデアに従ってプランされたと思うのですが。もしですね、二重の囲郭を持つような都市を理想的に造った場合には、やはり円形になったのでしょうか。円形というのは同じ面積の空間を確保するのに、一番少ない努力で獲得できる構造だと思うんですね。特に堀を二重に造るという複雑な構造の囲郭を造る場合、一番労力を節約できるのは円形のモデルではないかと思うのですが、そういう力が働いているのかどうかというのが私の質問です。

鍾：石原先生、ありがとうございます。中国城郭都市の囲郭については、長い研究史があります。特に、ここにあげたいのはG. William Skinner 編『The City in Late Imperial China』(Stanford University Press,1977)という本においてChang, Sen-Dou教授が「The Morphology of Walled Capitals」で論じている意見です。中国北方の矩形や正方形など四角形の都市は、もともとは『周礼』冬官、「考工記」、「匠人营国」の条のなかのアイデアに発したのではないかという考え方でした。『周礼』のアイデアが中国の正統的な考え方で、それが南方の方に広がっていったのではないかと考えています。

そして中原という一望千里の広大で平坦な平原に比べて、南の方は山地が多く、また呉越地域のような水が多いところでは、やはり正方形など四角形の都市を造るのには困難があります。しかも南へ行けば行くほど歴史的に国家の統制力が弱くなります。だから私の考えでは、中国の南方都市の建設は主2つの

要因に左右されていると思います。1つは北方の中原地域に源を発した正統的な城郭都市の造り方、あるいは造る思想、もう1つは経済的なコストの問題です。この2つの要因がたがいにせめぎ合った結果、様々な形態の都市が形成されてきました。だから江南地域において非常に重要な都市、例えば蘇州のような都市ではやはり矩形にする努力がなされていきました。そしてあまり重要ではない都市、経済的な都市、例えば寧波とか嘉定などでは円形に造られています。

松尾容孝：専修大学の松尾と申します。今の鍾先生のお答えは経済効率と形態の関連の話でしたが、そうすると今日提示された「夾城作河」構造の都市プランとしての意味についてですが、すなわち都市をそういう形に造るということにおいて、都市の機能をこういうふうにしたいからこうするという、そう側面が弱くはならないのか？、というのが最初の質問です。

また、それと関連しますが、内堀と外堀は交通施設としての機能を持っています。船で移動しますから、橋なんかで繋ぐのでしょうか。今日のお話にはありませんでしたが、内堀と外堀とを繋ぐようなところ、あるいは城壁周辺に繋ぐ機能をもつ都市施設に関するものが、今日に痕跡としてでも確認できないのかというのが2番目の質問です。それから「夾城作河」構造の囲郭を実際に造る場合ですが、どのように造っていくのでしょうか？例えば、外堀の内側の陸域に城壁を造ってその後内堀（「内塹」）を造るのでしょうか。これが3番目の質問です。

鍾：ありがとうございます。1点目から簡単に答えさせていただきます。中国全体としては、漢文化は中原文化とも呼ばれるように中原地方（黄河の中流・下流域）に源を発しました。そしてこの文化は次第に広がって南の地方にまで波及していきました。また南方の地方では経済的な考えが重視されます。行

政的よりは経済的な考えが重要です。中原地方の正統王朝など殆どの王朝は中国北方に都を置きました。南方の都市は、多くが港として、交通の要所として経済的要因によって発生しました。

2番目と3番目の質問にはまとめてお答えします。外堀と内堀の発生について、私は両方が同時に築造されたと考えています。すなわち城壁を造るのに、城壁を築造しようとする位置の両側から土を掘り、その土は材料に城壁を築造するのがコスト的に最も経済的です。ただ、明代中期の倭寇侵入の時のような緊急事態に直面した嘉定などでは非常に短期間で城壁を築造した例がありますが、基本的には経済的な要因が最も重要であったと考えられます。また、内堀は交通路としての機能がなくなった場合には、非常に簡単に埋立てられてしまいます。他の用途の敷地になってしまったりします。現代の上海や杭州のように、陸上交通は水上交通より機能的に勝るために、内堀はほとんど埋め立てられてしまいました。

野間晴雄：また中国に関する質問で申し訳ないのですが、少し他の地域にも広げながら質問させていただきます。1つは2重の堀について地理的な環境という点から発言されましたが、この堀について、内堀と外堀が同じ機能のもとに造られたということをおは留保すべきではないかと思えます。というのは、外堀というのは防御のための堀で、内堀はいわゆる生活のため堀というように、機能に違いがあるのではないのでしょうか。

そしてその場合、二つの堀の幅を考えなければいけないという気がします。つまり内堀の幅は狭く、外堀の幅が広いのではないかと思います。また排水ということも非常に重要な意味をもっているのではないかと思います。都市とその周囲の微地形をみると、都市の内側の中央の部分が高くて周囲に向かって内堀や外堀の部分は最も低くなっているとい

う事例はないでしょうか、というのが質問の一つです。すなわち都市内部の排水を内堀にもっていけるのではないかということです。それから呉越地域というのは、デルタがどんどん拡大していつている地域です。ですから古い時代のことを考えるためには、海岸線の変遷とか、特に潮汐の影響によって内水面の水位がどう上下していたのかというようにミクロな地理的環境に関連させて「夾城作河」構造を考えるべきではないのかというのが私のコメントです。

鍾：野間先生、ありがとうございました。まさに先生のおっしゃった通りです。内堀には排水機能というもう一つの重要な機能があります。現在、特に研究成果をあげていらっしゃるのが、私の報告の参考文献の最後にあげた陳冰先生で、先生は著書のなかで蘇州の内側の堀がどのような仕組みで排水機能も発揮しているかを論じています。

私は概ね野間先生の意見には同意いたします。ただ、計画的城郭都市において内堀や外堀を必ずしも低いところを掘るかどうかは決まっておりません。例えば紹興では、南の方はもともと湖沼であったところにわざわざ土を運んで埋め立てて城壁を築造しました。北の方は地勢が高いところですので土を掘って城壁を築造するというように、様々な手法を使って城壁や堀を築造しています。

林 和生：すでに5時を過ぎましたが、あとお一人だけ質問を受けさせていただきます。

水田義一：和歌山大学の水田です。楊先生にお尋ねしたいのですが、朝鮮の理想的なプランの都市の事例として水原の話をお聞かせいただきましたが、理想的都市といわれる由縁は恐らく、当時の様々な必要な施設、行政関

連とか経済活動関連とか、そうした施設を計画的に配置しながら都市を造っていったから理想都市と呼ばれるのだらうと思います。その時の理想都市の内容としては、様々な必要な施設を計画的にあるいは当時の理念に従って配列し、そして非常に立派な囲郭で周囲を囲んだ。そこまではわかるのですが、さらにそれらの諸施設を配列した街路パターン、きちんと計画的にそれらの諸施設を結びつけるような街路パターンを含めて計画的な理想都市のように思うのですが、街路パターンについて説明していただきたいと思って質問させていただきました。

楊：水原には人々の生活に必要な様々な施設があつて、例えば貯水池ですとか旅館ですとかがあります。水原の本当に独特なところを街路の面でいいますと、通常の場合は韓国では都市はT型の街路で構築されているのに対して、水原の内部は十字路で構成され、多くの人達はその街路を利用しています。それからもう1つ独特なところを述べますと、通常ですと主要な道路というのは東西に走っている道路ですが、水原の場合ですと東西以外にも南北方向にも主要道路が発達しているというところで、これは他の都市では見られない特徴です。

林 和生：質疑が盛り上がってきている所で申し訳ありませんが、これで第1セッションを終了させていただきます。まだ質問のある先生は申し訳ありませんが懇親会場にて個々に先生方にご質問していただきますようお願い申し上げます。今日、ご講演いただきました3人の先生方に、いま一度感謝の意味で皆様方から拍手をお願いします。どうもありがとうございました。（林 和生）